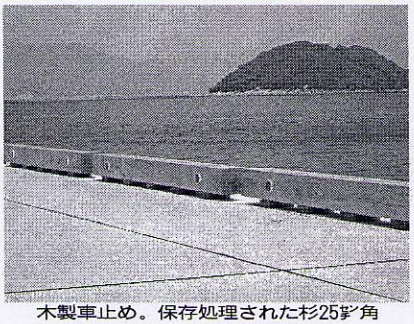
街づくりに木材を活用

転落防止柵、車止め、観光サインなど

唐津市で九州大学樋口准教授らが提案

唐津市（佐賀県）では市民と行政が一体になった「唐津みなとまちづくり懇話会」を設立し、30年単位での街づくり事業が進められている（6月28日付既報）。このなかで、賑わい・交流の拠点となる唐津東港地区では、木材の持つ親しみやすさ等を生かした木製ボラード（支柱）による転落防止柵、木製車止めなどの設置が始まっているが、ほかにもアドバイザー役を務める九州大学大学院工学研究院環境社会部門景観研究室の樋口明彦准教授を中心に、木材を使った様々な提案が進められている。

東港の中核となる壱岐フェリーターミナル（唐津みなと交流センター）の岸壁は両側にレンガ敷きのプロムナード（木製ボラードによる転落防止柵）、大規模災害発生対応用の耐震強化岸壁（取り外し可能の杉25㌢角による車止め＝ベンチとしても利用可能）の整備が始まっている。救命うきわも設置するが、木製ベンチも多数配置することで散歩や休憩するお年寄りが集まりやすくし、自然に監視がなされるような対応が目指された。内陸側には芝生公園が整備され、外延部には市民の植林による松林が育ちつつある。同港は最終的に日本の豪華客船「飛鳥」をはじめ世界のクルーズ船の立ち寄り港にしていきたいという構想があり、歓迎を示す意味での全体デザインも考慮されている。



木製車止め。保存処理された杉25㌢角で釣り人などのベンチ利用も想定

木製ベンチに人が集い　岸壁転落の監視も

一方、芝生公園内には、かつて石炭の積み出し港として栄えた唐津港の歴史を伝えるためプラットホーム（駅看板、床が木製）と線路が再現され、市民等の募金で制作された手押しトロッコ列車（シャーシ以外は木製）も用意された。

また、同地区には街づくりのシンボルとして近隣にある唐津歴史民俗博物館を移設する計画もある。これは旧三井合資会社の建物で、大変貴重な木造建築物。だが現状は傷みがひどく根本的な分解・補修が必要になっている。実現には大きな経費がかかるため企業等からの寄付を集めるなどの取り組みを進めている。

唐津東港地区と西の浜をつなぐ人道木橋。懇話会で作り上げ市に寄付された

東港地域から唐津城に到る西の浜をつなぐ部分には、樋口研究室が設計し懇話会で手造りした木橋がかかっている。現在は花火大会などで多くの人が砂浜に下りるために利用している。木橋の裏面には建築に携わった人々の名前も示されている。現在は船が通過する運河をまたぐ本格的な木橋の計画も立てているところだ。

現在、市の事業として進んでいるのが観光サイン（誘導標識）の設置だ。木製の本体に唐津焼の帽子を載せたデザインになる。樋口准教授は木製（九州木材工業のエコアコールウッド）＋陶器により観光客等への親しみやすさを出すとともに、アルミ、ステンレスに比べ低コストという点も指摘する。「今後は看板の世界で木材の採用が増えるのではないか」と話す。また「デザインの観点から見ると木材は非常に絵になるものだ。例えば電柱でもぜひコンクリートから木に戻したいくらい。ぜひ木材業界関係者には他資材と性能面で検討できる製品づくりを行ってもらい、木材が活用できる幅を広げてもらいたい」と話している。